

氏名	アンノウ マリコ ANNO MARIKO
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第216号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉英語能の研究 ― シアター能楽の創作過程を中心に ―
総合審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 塚原康子
（副査）	〃 准教授（ 〃 ） 植村幸生
	〃 〃（ 〃 ） 福中冬子
	武蔵野大学 客員教授 三浦裕子

（論文内容の要旨）

英語能は、新しい分野であり、年々と国際的に注目される芸能となっている。とくに英語能〈パゴダ〉が、2009年のヨーロッパ・ツアー、2011年のアジア・ツアーを通して多数の場で上演され、能のワークショップなども開催されたことが大きく影響している。また、これらのツアーによって、英語能が「国境を越えた芸能」として批評され、能の「国際化」を促進する方向へと向かったとも言われている。

英語能は、広義では、英語で作られた能をさす。狭義では、英語能のパイオニアであるリチャード・エマートによると、日本の伝統芸能の能（古典能）の構造・形式、音楽の手法を用い、能楽囃子も扱い、演者らも能の技法の経験がなければならないとされる。もっとも、英語能は、古典能、新作能、その他の芸術（映画、演劇、作曲、舞踊）から様々な影響を受けており、その位置付けは、エマートが言うようには明確に線引きできるものではない。しかしながら、本論文では、英語能と古典能との比較を検証を大きな柱の一つとするため、エマートの定義に従って分析作品を選定することにする。

本論文の目的は、英語能を楽劇（音楽・詞章・舞台の要素を取り入れた芸能）と捉えて、エマートの定義に基づく英語能作品を謡本や映像・録音資料を用いて分析し、古典能と比較することにある。それによって英語能の全体的な構造、テキスト、音楽の特徴や役割を明らかにする。さらに、作家や作曲家にインタビューをし、彼らの創作活動や演者との交流過程を調査した上で、新たに作曲された旋律型や手にはどのような意図があるか、また作家や作曲家がもつ能の音楽に対する知識によって、作曲技法、謡や囃子の編成、英語能の構造、音楽的特色にいかなる違いが表れてくるのかを考察する。

また、本論文では、英語能が舞台上で上演される前段階での交流過程で行われるテキスト（謡）の節付け、囃子の手附、面や装束の選択などを調査することによって、英語能の創作過程を追求する。創作過程に焦点を当てることで、英語能が能一番として作られる手法をみ、英語能の特徴や意義を明らかにする。

本論文は、五章で成り立つ。第一章では、エマートによる英語能の定義を提示し、彼の定義に当てはまる二つの英語能団体、(1)エマートが主宰する「シアター能楽 (Theatre Nohgaku)」と、(2)上田（宗片）邦義が主宰する「能・シェイクスピア研究会 (The Noh Shakespeare Group)」の歴史、作品、演者、上演の批評などについて述べた。また、彼らが英語能団体を結成したきっかけ、英語能に対する演者と言語の問題点へのアプローチ法と解決方法を辿った。

第二章では、シアター能楽の二つの作品、〈鷹の井〉(W.B. イェイツ作、R. エマート作曲) と 〈ジェーン物狂い〉(D. クランドル作) に焦点を当て、作曲家の文化的背景、学術背景、音楽背景、能楽背景などを理解した上で、彼らの作品の音楽分析を行い、また、彼らの作曲技法や方法を比較し、独自の音楽的

特色を明らかにした。

第三章と第四章では、〈パゴダ〉の創作過程と音楽分析を行った。具体的には、第三章で〈パゴダ〉の創作過程に焦点を当てることによって、作家のテキストに作曲家が節付けを行う交流過程、実際に作られた謡本を謡う演者と作家との交流過程、舞台に向けての演出者と演者の交流過程を、様々なレベルで観察した。そして実際の舞台とそれに対する観客の反応を考察し、英語能における演出家らの役割や、英語能に能楽師が関わることによる影響を明らかにした。第四章では、〈パゴダ〉の創作過程を理解した上で、作曲家のエマートが、英語のテキストを古典能のリズムに乗せる音楽方法（強勢拍リズムの英語を能の七五調のリズムに当てはめる作業）を謡本を用いて分析した。第五章は、これら全四章を総括し、英語能の定義を再考するとともに、英語能の可能性や、英語能に関わる問題点について述べた。

〈パゴダ〉の創作過程を通して、英語能における演出家の役割が浮き彫りになった。それは、演出家が試行錯誤を重ねることによって、古典能が現在の形になったように、余分な部分を削ぎ落とし、観客の反応を考慮しながら、次の舞台に向けて構造を変える自由があることである。一方、演出家がいることで、英語能は「演劇化」され、上演とともに練り上げられた舞台は、次第に収斂し、完成度が増していった。

英語能は、主に英語圏や英語が理解できる観客を想定して作られている。それゆえ英語能は、彼らにとってより身近に感じることでできる「新しい芸能」である。総合芸術である能のもつ視覚的な美、音楽的な美、所作の美などに、英語能は、言語の美や新しい作曲を加え、観客が興味を持つ刺激的な題材や人間が共感できるリアルな題材を用いて、人々の心を動かす舞台を作ることができる。また、英語能は、他の国の人々が自分たちの言語で能を作るきっかけともなり、「国境を越えた芸能」として能の国際化を促進することができるだろう。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、「英語能」という新しいジャンルの生成経過と現状を、主にリチャード・エマート率いる英語能団体「シアター能楽」の既存二作品の分析と直近の新作〈パゴダ〉の創作過程の取材を通してつぶさに観察・記述するとともに、その位置づけと可能性を考察したものである。

英語能は、新作能の一形態とも見なしうるが、当然ながら言語を英語に置き換えることによる諸問題（能の音楽技法との齟齬や固有の演者確保の困難など）を内包し、定義にもよるが一方の極には古典能の影響の色濃い独自の舞台芸術としての可能性も開けていないではない。そうした、現時点で未定形のジャンルである英語能をはじめて研究課題として取り上げたことは本論文の意義の一つであり、とりわけシアター能楽の新作〈パゴダ〉のアジア・ツアー（2011年）を密着取材し、関係者からの聞き書きを交えて各公演（東京・京都、北京・香港）の状況を比較しつつ描き出した第3章は、「英語能の今」を示した詳細な調査報告として面白く読める部分である。

一方で、英語能の抱える課題や数々の問題点を、枠組みを仕立てて論理的に追究しようとする姿勢が全体として希薄であり、ともすれば調査報告とそこでの平凡な観察に終始しているかのような印象を与えてしまう点がまま見られた。しかし、主要な研究対象としたシアター能楽の実践を相対化するような異なる実践例に乏しい現状では、研究対象に密着しつつ批判的に観察し、英語能の進むべき方向性を見定めること自体がそう易しくはない。その中で、英語能の将来性や可能性、そしてその評価は、どこで・誰が・誰に向けて・何のために発信するのかという点と不可分に関わってくるのだが、それらに対する認識は十分ではないにせよ本論文にも認められる。同時に、どのような形であれ英語能の実践には古典能の技法と資産とが不可欠であることや、女性や外国人の演者の問題が重なる点も浮かび上がった。

来日から7年、古典能を中心に勉学と稽古を重ねながら英語能という未定形のジャンルの研究と向き合ってきた申請者が、将来への出発点となる研究成果を収めたものと認め、合格とする。今後、英語能

の現場から実践と論述の両面で発信を続け、このジャンルの確立と発展に貢献することを期待したい。